



## —佐久穂町の昔の集落の暮らし—

昨年度に引き続き、主に80歳以上の方に幼い頃や若い頃の暮らしの様子についてお話を聴かせていただく活動を行っています。今回は、2つの地区のお話をご紹介します。

### 畑ケ中 幼馴染の二人の思い出より

畑ケ中でともに育ち、今もそこで生活する幼馴染の高見澤さんと佐塚さん。お二人に幼い頃の思い出を聴かせていただきました。

#### お風呂は当番制！ご近所さんとの助け合い

お二人が子どもの頃は、お風呂はすべての家になく、お風呂のある家へご近所さんが入りに来ていました。「お風呂を焚くと『こんばんは、お湯貸しとくんなんし』『よくおいでやした』とうちのものはもてなしたんだ」お風呂を借りに来た人へ、お茶や漬物などを出してふるまったそうです。お風呂のある家が、交代で焚き、毎日順番でどこかのお風呂に入っていました。当番のお宅は大変だったようですが、お風呂上りに囲炉裏でお茶を飲みながら交流するなど情報交換の場でもありました。



畑ケ中地区は、余地川と抜井川の合流地点があり二つの川から用水やせぎ（堰）を引いている

### 上区影 同じ年のお二人のお話より

たまたま同じ年に同じ年齢でお嫁に来た、岡部光恵さんと岡部のぶゑさん。当時は、女の人の仕事は数多く、大変だったようですが、「頑張りましたよ」とにこやかに話されるお二人の芯の強さを感じました。

#### 十九夜（じゅうくや）のお話

影地区とお隣の新田地区の間には、十九夜塔という石碑があり、3月19日に念仏を唱える行事を行います。「公民館ができてからは、そこに集まってお十九夜さんをしたんだ。お産や、子どものことでね。」と話してくださいました。当番の家で行っていた念仏講が、お嫁に来た頃には公民館で行う行事になっていたそうです。後日、佐久町誌で調べると、昔は様々な集落で行われていた女性の行事であったとのこと。今も、大切に女性たちが引き継いでいます。



北八ヶ岳の裾野に広がる上区の中集落である影地区に今も残る十九夜塔

畑ケ中、影のさらに詳しい記事は、公式noteで公開中です。随時、他の記事も追加していきます。右記リンクよりどうぞご覧ください。

さくほ集落の話の聴き手 公式note  
<https://note.com/sakuhosyuraku>



### 募集

現在の佐久穂町内で撮影された「古い写真」を募集中！

写真プロジェクトでは、この地域に暮らした方々の古い写真とエピソードを募集し、2月下旬に茂来館にて写真展を開催します。デジタル写真の存在とは違い、カメラも珍しい頃のもの、その時代を知るととても貴重な存在です。写真をお持ちの方はご連絡ください。

#### 時期

おおよそ大正12年頃～昭和30年代位

#### 内容

日常的な風景や景色でも構いません（どういったお写真かお話を聞かせください。）



## 大久保と人の暮らし

国道141号にある畑の信号を入り、小さな四差路を右折し、坂道を上りきった河岸段丘の窪地に大久保集落がある。全戸数19軒の小さな集落である。この小さな集落には、自慢できるものが4つあるという。文書としての記録が残っていないが、かなり古い歴史を持つ大光寺という寺、30年前までは住職がおり、生きたお寺であった。お寺の前庭に、樹齡は分からないが、幹の周囲が3mもある大銀杏の木、大光寺の傍の小高い丘にある諏訪神社、こんな小さな窪地の集落にあるのかと驚かれた広い田んぼ。その田んぼの広さから一町町（いっちょうまち）と呼ばれていたという。



イラスト 江村康子

※一町=約10,000㎡



カーネーションハウスの前に立つ笹崎茂人さん

大久保の長老である笹崎茂人さん（来年90歳になる）はこの集落で生まれ、生きてきた。中学を卒業してすぐに花卉栽培に取り組んできた。初めは、りんどうを育て、その後、菊栽培に代わり、昨年まではカーネーション栽培をしてきた70年を超える花卉農家であった。「子どもの頃は、畑八小学校へ通ってたが、道がなく、上野集落にある上野坂を通らなければ下（しも）には下れなかった。不便でやしたよ。学校が見えるのに、わざわざ遠回りしないと学校へ行けなかった。」と、聞きなれないイントネーションで話すので、聞き取るには何度も聞き直さなければいけなかった。「子どもの頃の思い出と言えば、大光寺の庫裡（くりと呼ばれる台所のこと）の縁の下や天井裏に入り込んで遊んだこと。天井裏にはコウモリがいて、手で捕まえたこともあったな。」買い物に行くには高野町に下る方が便利で、清水町に行くことはなかったという。

結城哲治さんは29歳で大久保集落に移住して35年になるという。初めはリンゴ栽培をしていたが、もともとは北海道で野菜農家だった経験を活かし、白菜農家に転換。6町歩の畑で白菜を栽培し、年間10万箱を出荷している。新規就農者の先駆けである。農業法人化し、現在は若い人を6人雇用している。

「土は財産である。土地は自分のものではなく、使わせてもらっているだけだと農民は認識しなければいけない。」と、結城さんは言う。「野菜の収穫適期はわずか2日間です。この適期を見逃さないよう、細心の注意を払って、野菜を育て、販売している。結城の野菜は質が良いという評判をつくるのに30年かかった。」



笹崎源一郎さん 養豚場の前にて

笹崎源一郎さんは、歴史の古い家に生まれた。土蔵に保管されている古文書によれば、寛永6(1629)年、大窪村（現在の久保集落）に住んでいた記録があるとあるという。父親の代までは、養蚕と稲作で生計を立てていた。源一郎さんは、養蚕と稲作では生活が安定しないと考え、天候に左右されず、ある程度の定期収入になる養豚業を選んだ。幸い、叔父が埼玉で手広く養豚会社（サイボク）を経営していたので、1年間の研修を終えた後、平成元年に種豚を育てる養豚業を始めた。その当時、八千穂村には、30軒の養豚業者がいたという。源一郎は、現在は20頭の種豚を飼育している。大久保の暮らしには、不満はないという。「区内には高野町に下る道があり、5分もあれば、スーパー、役場、病院に行ける。ここは、高台で、国道141号から離れているので、静かな暮らしが出来る。欲をかいたらきりが無い。どこに自分の標準を置くかが大事です。」（文責 西村寛）

こぼれ話やその他記事等は公式noteにて公開中！

佐久穂 集落 note



発行・問合せ：佐久穂町役場 総合政策課 政策推進係

TEL.0267-86-2553 〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地

